

# ICT を活用した英文速読演習の試み

—CALL 教室における *SRA Reading Laboratory*® :Rate Builder の活用—

## An Attempt of Speed-Reading Practice utilizing ICT

—The Utilization of *SRA Reading Laboratory*®: Rate Builder in the CALL System—

柏原郁子\*

IKUKO KASHIWABARA

Keywords : ICT、CALL、*SRA Reading Laboratory*®、英語リーディング、授業方略

### 【要 旨】

大学で開講されるリーディングの授業では、英語を一語一語日本語へ訳す逐語訳に重点が置かれることが多い。今回の試みでは、CALL 教室にて実施するリーディングの授業において、*SRA Reading Laboratory*® Rate Builder（以下 *Rate Builder* と表記）を教材とし、1 分間で約 1 5 0 ワードの英文を読みきり、内容に関する英文質問に対する答えを選択するという英文速読演習を実施し、CALL のアナライザーの機能を使って、学生の解答データの収集及び分析を行った。

その結果、「標準語彙水準 SVL 1 2 0 0 0」<sup>1</sup>（SVL=Standard Vocabulary List）のレベル 1（習得語彙数 1 0 0 0 語以下）の学生でも、速読演習で高い解答率を維持することができる。さらに、学生の習得語彙数レベルを超える教材に取り組んだとしても、速読演習を繰り返すことで、TOEIC のリーディングを時間内に読了するために必要な 1 分間 1 5 0 ワードの英文を読みこなすレベルに到達することができることが判明した。このことは、基礎単語力の不足している学生に対しても、英文速読の演習を積極的に取り入れることで、学生のリーディング力の向上が期待できることを示している。

通常のリーディング授業ではあまり実施されない英文速読演習であっても、CALL 教室の有効活用によって、短時間で英文を日本語に介さず英文を理解でき

---

\*大阪電気通信大学工学部英語教育センター 准教授

<sup>1</sup> 詳しくは、<http://www.alc.co.jp/eng/vocab/svl/index.html> を参照せよ。

る効果的な英文速読演習を提供することができる。本稿では、その方法と指導手順について詳細に述べることにする。

## 1. はじめに

大学における英語科目として、40名から50名を対象とする英語リーディングの授業を実施する際、学生は、テキストにある英文を日本語に訳しながら、文章もしくは単語に関連する練習問題を解いていく、という授業が一般的であろう。中学校、高等学校の授業においても英語のリーディングでは、英単語を辞書で確認し、文法構造を解説しながら、日本語に置き換えるということを経験された人は少なくないはずである。

もちろん、英文を正確に日本語に訳す作業は、重要であり、何語を学習するにも避けて通れない。しかし、資格試験である TOEIC を実際に受験した学生は、受験後に「リーディングの時間が足らず、全部の問題に目を通すことができませんでした」という感想を述べることが多い。確かに、TOEIC のリーディングの英文を日本語に訳しながら読んでいたのでは、時間内に読み終えることはおそらく不可能である。リーディングで点数が伸び悩めば、TOEIC 500 点にもなかなか到達し得ない。

TOEIC のリーディングを時間内に全部問題を解き終えるためには、1 分間に約 150 ワードから 180 ワードのスピードで読み通さなければならない、と言われている。そこで、ここでは ICT を活用した英文速読演習の試みとして、日本語を介さずに英文を速読し、内容を確実に理解できることを目的とした。毎回の授業では、学生に 1 分間という限られた時間で 150 ワード前後の英文を日本語に訳さずに読ませ、その英文の内容が理解できているかどうかを確認するための英語の質問を行い、選択肢から回答させるという形式でトレーニングを実施した。

## 2. 英文速読演習

ここでは CALL 教室を活用したクラス（学生数 44 名）を対象とした場合を紹介する。適切な教材を提供するためにも、授業開始時に各学生のおおよその習得語彙数を計ることにした。英語力の計測には、e-Learning 英語教材アルクネットアカデミーのスタンダードコース内にあるレベル診断テスト（語彙診断テスト）を活用した。この語彙診断テストの判定は、アルクの「標準語彙水準 SVL

12000」(SVL=Standard Vocabulary List)を基準にしている。判定結果は次のようになっている。

判定	レベル	おおよその習得語彙数
上級-上	レベル8	7,000語以上
上級-中	レベル7	6,000語～7,000語
上級-下	レベル6	5,000語～6,000語
中級-上	レベル5	4,000語～5,000語
中級-中	レベル4	3,000語～4,000語
中級-下	レベル3	2,000語～3,000語
初級	レベル2	1,000語～2,000語
入門	レベル1	0語～1,000語

実施したクラスの語彙診断テスト結果の分布は次の通りである。(図1)

〔図1〕「語彙診断テスト：レベル別人数分布」

図1から分かるように、44名のクラスの中で約43%にあたる19名の学生が2000語レベル以下であり、34名の77%の学生が、3000語以下の総数になるという状況である。語彙力2000語以下とは、中学校で学習する必須単語を学習済みというレベルで、ごく簡単な読み物なら読めるレベルであると言われている。

## 2. 1 教材の選択

学生の大半が習得語彙数 2 0 0 0 語レベルで、しかも速読の練習など過去にやったことがなく、「英文はまず日本語に訳しなさい」と指導されてきた学生に、英文速読速解の感覚をつかんでもらうためには、どの教材を選択するかが鍵である。90分という限られたリーディングの時間内で、速読演習に費やせる時間はおよそ10分程度であろう。そのため、英文速読→問題解答→解答確認の作業を10分以下に押さえる必要がある。習得語彙数 1 0 0 0 語以下の学生を考慮に入れると、あまり難しい語彙レベルの英文を選ぶと何も理解できず、「全く英語ができない」、という印象が強くなり、英語嫌いが加速する危険性が高くなる。そこで、使用する英文はひとつが総語彙数 1 5 0 ワード以下であり、実施回数に従ってレベルがゆるやかに上がるような英文とし、質問事項に対し選択形式とするものとした。

このような条件を十分に満たしていたひとつが、McGraw-Hill 社 *SRA Reading Laboratory® 2b* である。*SRA Reading Laboratory® 2b* には *PowerBuilder* と *Rate Builder* にわかれており、英文速読には *Rate Builder* が適当であろう。なぜなら Aqua-Blue-Purple-Violet-Rose-Red-Orange-Gold-Brown の順に語彙レベルが上がっていき、各レベル 15 個のストーリーを選択できるようになっている。単語総数は Aqua で約 80 語、Brown で約 200 語であるので、読み通すのに 1 分という枠を設けても、読み通すことのできない学生は少ないはずである。標準語彙水準 SVL 1 2 0 0 0 に照らし合わせると、内容の語彙レベルは Level 2 ～ 4 であり、わからない単語が幾つかあっても、辞書なしでなんとか内容把握できるレベルである。

一回の授業で 2 つの *Rate Builder* を選択し、Aqua～Blue までは各レベル 1 回、Purple 以上は 2 回の授業にわたって速読演習することにした。参考までに *Aqua 2b Rate Builder 10* と *Orange 2b Rate Builder 01* を挙げておく。(図 2、図 3)

A famous writer bought new gym shoes. After a while, he noticed they were tight. They pinched his toes.

Then he thought of something. When water freezes, it expands. That means it gets bigger; it takes up more room.

So the man put a plastic bag into each shoe. He filled the bags with water. He put the shoes in the freezer.

The next morning, the water was frozen solid. It had expanded. It had stretched the shoes. Now they fit perfectly!

[図 2] *Aqua 2b Rate Builder 10*

What makes mosquito bites itch?

In the first place, a mosquito doesn't actually bite people. Rather, it pierces a person's skin. To do that, it uses a tiny, needle-like tube at its mouth.

Once the skin has been punctured, the insect sucks blood from its victim. But human blood is quite thick for such a tiny tube. So before the mosquito sucks up any blood, it injects a few drops of its own saliva under the skin it has pierced. This thins the blood in the area so it can be drawn more easily through the narrow tube.

A mosquito's saliva is irritating to humans. That's why you feel itching and swelling when you don't swat a mosquito quickly enough. Incidentally, fleas do the same, only worse - each flea has two tiny tubes and uses them both at the same time!

[図 3] *Orange 2b Rate Builder 01*

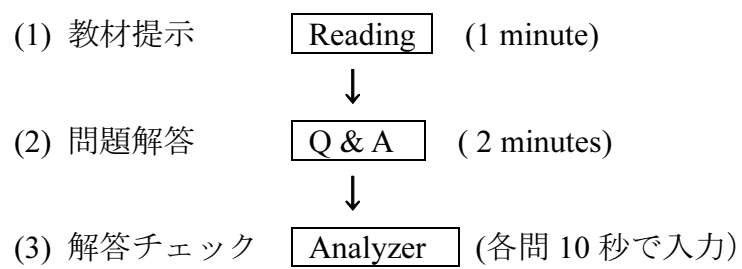
## 2. 2 CALL 教室における指導手順

しかしながら、44名の学生を対象とした授業で、毎回 *Rate Builder* を必要枚数分を用意するのも手間がかかるし、教材を配布するにも思いのほか時間がかかる。そこで CALL 教室を使用することによって、効率的に速読演習を行うことにした。まず最初の授業で、学生が各自 *Rate Builder* の解答を記録する「*Rate Builder* 記録表」(図 4)(図 5)を配布し、学生が速読する教材は教材提示装置で学生にモニターを通して提示することにした。

〔図 4〕「Rate Builder 記録表」

〔図 5〕「Rate Builder 記録グラフ」

指導手順は次の通りである。



(1) ではモニターで提示することを先に述べたが、提示するのは英文のみにする。学生には、開始時に時計で1分間正確に計ることを知らせ、「分からない単語が文章に含まれていても、気にせず読み進め、全体に何が書かれているのか凡そつかめればいい」と伝える。突然終了すると、焦る学生もいるので、終了5秒前を伝えるなどすることで、学生も読むスピードを調節できるようなる。

(2) では、(1) で提示していた英文を見せずに、英語の Q&A の部分のみ提示する。質問に答える際、英文を見ることができないので、一旦頭で理解し、整理した情報を頼りに質問に答えることになる。解答時間は一問に20秒くらいに設定するといいたいだろう。質問を見た瞬間に、解答を選択できるように内容を頭の中でイメージ化し気楽に選ぶように伝えて演習を重ねていくと、やがて全員2分以内で解答を済ませるようになった。

(3) の解答チェックは、CALL 教室ならではの「アナライザー」機能を活用することを勧めたい。通常50名規模のクラスを運営する際、小テストなどの処理は悩ましい問題であり、解答用紙を回収して採点する労力を考えると、小テストなどする気になれないものである。さらに各学生がどの問題を選択し、各問題がどの位の解答率なのかを示すデータ解析などを瞬時に行うなど TA (Teaching Assistant) のサポートでもなければ不可能だろう。クラス内の学生一人に解答を尋ねるとなると、学生の声が小さく解答は聞きづらいし、当たらない学生はテンションが下がり、解答さえしなくなる学生がでてくる可能性がある。

CALL システムに含まれる「アナライザー」機能を活用すれば、先に挙げた問題点は全て解決される。今回使用した CALL 教室にはパナソニック社の L3 (エルキューブ) が導入されており、「アナライザー」機能を選択すると、学生のモニター上に1〜6番の選択肢が現れ、学生は回答をマウスで選択する。教師用 PC で、問題の解答設定時間を10秒毎延長設定することができるが、解答にかける時間は短いほど学生の集中力が逸れることがないので、10秒以内が適当であろう。アナライザーの利点として、学生は解答設定時間が終了すると、問題の解答をモニター上で知ることができるし、各選択肢を選択した学生の人数も、全体の解答率もすぐ明示される。学生には各問に解答が表示されたら、直ぐに「Rate Builder 記録表」に記載された自分の解答が、正解か不正解を記入するよう忘れずに伝えたい。学生個人に毎回記入させる紙ベースの記録表は、学生自身が自分の進捗具合を把握し、グラフ化することで成績の変遷を一目で見



て取れる利点がある。

教員用パソコンには、各学生の名前と解答番号そして正答問題数がエクセル上に数値化され蓄積されるので、そのデータを持ち帰れば、容易に採点や集計が可能である。毎回の学生の成績を次回の授業で学生に詳細に知らせる必要はないだろう。ただし満点を取得した学生は名前を読み上げるようにしておくと、学生は、教員が自分の解答状況を把握していることが分かるので、毎回の速読演習に意欲を持って臨むことができるように思われる。学生の学習意欲を高めるための工夫も忘れてはならない。学生がどのように「Rate Builder 記録表」に記入していたか、次の図を参考にして頂きたい。(図 6)

〔図 6〕「学生の Rate Builder 記録表の例」

### 3. 速読演習による学習効果

速読演習によって得られた学生の解答データをみてみよう。ここでは、各学生の解答データを、習得語彙数レベル1～2（2000語以下、●で表示）、習得語彙数レベル3～4（4000語以下、▲で表示）、習得語彙数レベル5～6（6000語以下、■で表示）のグループにわけ、横軸に *Rate Builder* のレベルを、縦軸には10点満点換算した得点の平均値を示している。（図7）

〔図7〕「*Rate Builder* 速読演習平均点の推移」

この図から、英文速読演習の経験のない学生でも、1分間に150ワード程度の英文を読み切り、その内容についての読解問題を正確に答えることができることが見て取れる。そして、*Rate Builder* のレベルがあがるにつれて、解答の平均値が極端に下がる傾向は見られず、上昇するか、下がっても6点以上は維持している。毎週2つの *Rate Builder* に取り組むだけでも、英文速読に慣れてきていることがわかる。頭の中で日本語への逐語訳をしていたのでは、1分間では読み切れないだろう。しかしながら、殆どの学生が1分以内で読み切り、正確に問題に解答できるようになっていることから、英文を英文のまま理解するようになっていると考えてよいだろう。

まず習得語彙数レベル1～2のグループでは、初回の演習で、正答率が他のグループよりも低くなっていたが、演習の回を追う毎に、他の上位レベルの正答率と差が開くことなく、ほぼ同様に推移している。この *Rate Builder 2b* の習得

語彙数 VSL のレベルはほぼ Level 3 ～ 4 であることを考えると、適応したレベル問題を設定することで、習得語彙数レベルよりも高いレベルの英文を、十分内容を理解し、速読演習に対応しているという解答の状況であると思われる。

次に習得語彙数レベル 3 ～ 4 のグループの平均点の推移を見ると、レベルが上がり、問題によって得点が多少下がることがあっても、高い解答率を保持したまま速読演習をこなしている。さらに、習得語彙数レベル 5 ～ 6 のグループには 2 名しか属していないので、グラフの推移が他のグループよりも差が激しいが、演習の半分以上が 90% 以上の解答率を保持しており、十分に英文を理解していると言えよう。

#### 4. アンケートによる評価

授業終了時に、この *SRA Rate Builder* を用いた速読演習を経験した学生を対象に、「速読の教材は英語力向上に、役に立ちましたか」というアンケートを実施した。44 名中回答を得た 42 名のアンケート結果は次の通りである。(図 8)

[図 8] 「学生によるアンケート評価：速読の教材は英語力向上に役に立ちましたか」

速読の演習が英語力の向上に役にたったと感じる学生が圧倒的に多いのがわかる。解答率の推移からも推測できるが、1 分間で読んだ英文の情報を、日本語を介さずに読み、そして読解力を試す問題を正確に答えることができる経験を積んだことが、英語力が向上するのに役に立つことを実感できたのではないだろうか。また、学生から寄せられた意見のいくつかを以下に示す。

- ・短時間で集中して読むということはあまりないので、いい刺激になった。

- ・速読の教材でみんながどれくらい問題を解けているかが分かるので、参考になった
- ・速読でパラグラフの中のどの部分を読み取ればいいかが少しずつわかってきたので、良かったと思いました。
- ・速読をする機会が少ないので、久しぶりにできてよかった。続ければ英語力向上にもなるはずだと思う。

アンケートにある学生の意見からも、授業内で速読の演習を積極的に実施する必要があるように思われる。今回は CALL 教室のアナライザー機能を利用して、短時間での英文速読演習を実施することが可能になった。CALL 教室と言えば、リスニング重視の授業などの運営に活用されることが多いのだが、今回のような、リーディングの授業においても、速読演習などで効果的に用いられる可能性を見ることができた。稼働率が必ずしも高いとはいえない CALL 教室を抱えている教育機関に対して、リーディングの授業にも積極的に活用できることを提言したい。

## 5. まとめと今後の課題

今回の実践で得た解答率のデータから、習得語彙集よりも高い語彙レベルの英文を速読しても、学生は高い問題正答率を得ることがわかった。この試みでは教材として *SRA Reading Laboratory 2b* の *Rate Builder* を活用したが、習得語彙数レベル3以上の学生に対しては *SRA Reading Laboratory 2c* または *3a* 以上のものでも十分に対応できると思われる。

また学生にとって、速読演習を続けてきた結果、どれだけ英語力がついたのか目に見える基準が必要になる。TOEIC の試験を学期開始前、学期終了時に受験してもらうのも有効だ。だが、学生に強制的に受験させる術はなく、また受験の費用の負担も問題となる。今回アルクネットアカデミー：スタンダードコースにある英語力判定テストの語彙テストを授業初回に受験してもらったが、このテストは一回のみの受験しかできず、授業終了時に同じテストを用いての伸長度を計ることができなかった。最新のアルクネットアカデミー2を活用できれば、修了テストが複数回受験することがきるので、次回は学期終了後に再度受験してもらうことも良いだろう。

「継続してやれば英語力向上につながると思う」という学生の感想からも分

かるように、やはり週一度の演習よりも毎日継続して速読演習を行えるほうが、効率的にリーディング力を伸ばすことができるに違いない。そのためにもいつでも速読ができるような環境を学生に提供する必要があるだろう。*SRA Reading Laboratory* は紙ベースの教材なので、教室内だけの利用に限られるのが非常に残念である。この優れた教材が Web ベースで利用できる教材に改善されれば、より多くの学生が教室内外で利用できるようになり、リーディングの教材として今まで以上に有効利用されるはずである。今回 CALL 教室の教材提示装置やアナライザー機能を活用して初めて、約 50 名の学生を対象とした授業で *Rate Builder* を速読教材として利用することができた。今後 *Rate Builder* のように短時間で直読直解の速読演習が可能となる e-Learning 教材の開発を行っていくことが課題である。Web 上でアクセスできる e-Learning 教材が開発されれば、語学に特化した CALL 教室を備えていなくても、パソコンの演習室でも実施が可能となるであろう。

#### 参考文献

*Aqua 2b Rate Builder 10, SRA Reading Laboratory® 2b*, ©1989, Science Research Associates. Inc, The McGraw-Hill Companies, Inc.

*Orange 2b Rate Builder 01, SRA Reading Laboratory® 2b*, ©1989, Science Research Associates. Inc, The McGraw-Hill Companies, Inc.

William Grabe, *Reading in a second language: Moving from theory to practice* (New York: Cambridge University Press, 2009)

Paul Nation, I.S.P. Nation, Michael H. Long, *Learning Vocabulary in Another Language* (New York: Cambridge University Press, 2001)